

〈エッセー 地方の知られざる歴史〉

史跡と算額のある終の棲家

鳴海風

野間大坊の通称で知られる真言宗の大御堂寺（愛知県知多郡美浜町）には、源頼朝の父義朝の墓がある。

そこは、勤務地からは少し遠いが、終の棲家としてマイホームを建てた住居地

である。引越してまもなく、この古刹を訪れた。

平治の乱で敗れた源義朝は、わずか十人ばかりの郎党を連れて、平治元年（一一五九）十二月二十八日、この近くの長田忠致を頼って身を寄せた。ところが、年が明けた正月三日、忠致に裏切られ、入浴中に殺された。

「我に木太刀の一本なりともあれば——」

と義朝は叫んだという。

義朝の墓には、今でも真新しい木刀が山のように供えられている。近くには、義朝の首を洗ったという血の池まである。

のちに頼朝は父義朝の菩提を弔うため七堂伽藍を建設した。建長二年（一二五〇）の銘がある梵鐘は国の重要文化財である。寺は、豊臣秀吉や徳川家康の庇護も受けた。

本尊の阿弥陀如来像が鎮座する本堂は、比較的新しく、宝暦四年（一七五四）の建立である。訪れた時、階段を上がって右側、鴨居のあたりに、算額のレプリカを見つけた。江戸時代に流行した算額は、

難しい数学の問題が解けたことを神仏に感謝するために奉納した、絵馬の一種である。

この算額は、明和八年（一七七二）十一月に、榎本章清が奉納した。隣接する南知多町の光明寺や泉蔵院にも、章清の奉納した算額が残っている。

榎本章清は、名古屋の関流数学者葛谷実順の弟子だった。章清は大地主で酒造業も営んでいたらしいが、勉強家で生涯を数学の研究に捧げていたという。

光明寺の算額には、ひっくり返さないと読めない裏面に、こんなことが書いてある。

「……愚答を記しておくものである。しかし、生来愚かで、悪筆の我であるから、文字を誤り、術の誤りもあると思う。以後算道に明らかな人がご覧くださっても容赦ください、悪いところは補いお直してください」

謙虚な内容だが、本心かどうか。大御堂寺に奉納した算額の第三問は、十八次方程式を解いて正しい答えを出している。一年前から、江戸時代に発達した日本



大御堂寺の算額（レプリカ）

から電話がかかってきた。私
が応募した関流
数学者建部賢弘
を主人公にした
小説『円周率を
計算した男』が、
第十六回歴史文
学賞を受賞した
という妻からの
連絡だった。プ
ロを目指すと決
意して十三年目
だった。
それから三十
年、義朝のよう
に入浴中はもち
ろん、寝首を掻
かれることもな

の数学和算わさんに興味を持ち始めた私が、身
近に算額のある場所に引越したのは偶
然だが、運命でもあったのかもしれない。
翌年の十二月、勤務先が明日から年末
年始休暇で、大掃除をしている時、自宅

く同地に住んでいるから、ここが終の棲
家になりそうだ。